

漢語アクセントにおける低起上昇型間の揺れ

加藤大鶴(早稲田大学)

1 問題の背景と、本稿の目的

漢語に加点される声点を分析していくと、個別的な文献の内外で異なる姿が現れ、処理に困ることが往々にしてある。その要因のいくつかはすでに明らかにされているが、なおよく分かっていないものもある。石山裕慈 2011 は『本朝文粹』諸本における漢語声点を比較し、諸本間における揺れを取り上げて、その揺れには説明可能な部分もありながら全体としては説明しきれない部分も多く残ることの難しさを述べている。稿者も石山の問題提起を受けて『和漢朗詠集』諸本の漢語声点を比較した(加藤大鶴 2025) が、確かに学習の弛緩とでも呼べるような一定の傾向や変化の方向性を持たない揺れも散見され、分析の困難さに対して同じ思いを共有するものである。本稿ではそうした揺れとして現れる声点型に対する、部分的かつ試験的な解釈のひとつとして、「低起上昇型」*1 という枠組みを論じる。

さて、先行研究でも比較的良好に合意されている、諸本間で説明可能な漢語声点の揺れは次のように整理されよう(本稿では声点については〈 〉、韻書等から知られる調類は《 》の形で示す)。

1. 漢音において《平》《入》それぞれの軽重の区別が衰退するか、差声体系として区別されないことがある。
 - 〈平軽〉であるべきものが〈平〉となることがある
 - 〈入軽〉であるべきものが〈入〉となることがある
2. 漢音の母胎である唐代末長安音において全濁上声字が去声化したことが資料や字によって異なる。
 - 全濁《上》が〈上〉だけでなく〈去〉となることがある
3. 呉音漢音にかかわらず、1拍去声字は日本語における鎌倉時代ごろの上昇拍の衰退の影響で、上声点が加点される傾向がある。
4. 《去去》《上去》のように「中低形」となる声調の組み合わせは、回避される傾向にある。
 - 呉音を中心に後項が高平となって〈去上〉(漢音では〈上上〉も)となることがある
 - 漢音を中心に後項が低平となって〈去平〉となることがある
 - 中低形の回避は《平声軽去》《平声軽上》でも生じるが、十分に報告されていない
5. 異なる字音系統に由来するものが混在したり、韻書に複数字音がある。
 - 韻書で《去上》「漢武」〈去上濁〉カムフ [専修・朗詠集 1-29a2]
 - 呉音で《平平》「漢武」〈平平濁〉 [岩瀬・朗詠集 1-31b1]

こうした原理では説明できない揺れが、次のように低く始まって上昇する型(これを「低起上昇型」と呼ぶ)の間で揺れるものである。

*1 これまでも加藤大鶴 2015・2020・2024 でも部分的に言及してきた。

- (a) 「翡翠」 去上 = RHH [古抄本新猿楽記 064-08] — 平去 = LLH [康永本新猿楽記 097-01]
- (b) 「祈祷」 去上 = RHH [前田本色葉字類抄 2/061a/4] — 平上 = LHH (韻書)
- (c) 「勝負」 去上 = LHH (韻書) — 平上 = LLH [前田本色葉字類抄 2/085a/7]
- (d) 「悵望」 去上 = LHHH [岩瀬・朗詠集 2-34b3] — 平去 = LLLH [専修・朗詠集 2-34a6]
- (e) 「范蠡」 去上 = LHHH [専修・朗詠集 2-15a6] — 平上 = LLHH [陽明・朗詠集 221-1]

(a)～(e) のように〈去上〉と〈平上〉あるいは〈平去〉で現れるものはいずれも低起上昇型間の揺れとみなす。このような加点は従来、漢語声点の変化や揺れの問題として扱われて来ていないように思われる。一般的に、声点の揺れを扱う場合、それが一定の傾向や変化の方向性を持つ、必然性のある説明が可能な現象なのか、偶然まとまりのある現象として見えているだけなのかを峻別することは容易ではない。こじつけとしての説明とならないよう現象の認定には制限があってしかるべきであろう。従来、去声が上声に変化することは広く受け入れられている(〈去去〉と〈去上〉、〈去上〉と〈上上〉等)ように思われるが、平声まで認めてしまわないのは融通無碍に何でも説明できてしまうことを防ぐ意味合いもあるかもしれない。

しかし例えば「紫苑」シヲニ〈去上上〉[観智院・名義抄僧上 43 - 6]とあるのが「シヲニ(しをに)」〈平上上〉[伏見宮家本・古今集 441][家隆本・同]でも現れる現象について、語頭の去声拍(RHH)が高拍に後続するアクセント型を、低く始まる特徴を活かしてLHHと実現させた例と見なすことはそう不自然なことではない。これを仮に漢字単位に加点される声点で表現すると、〈去上〉と〈平上〉で揺れたということになるだろうか。

本稿ではこうした低起上昇型間の揺れを捉えるために、二字で構成される漢語とそれに加点される声点を取り上げ、①現象として(〈去去〉-)〈去上〉- 〈平去〉- 〈平上〉となるものがどれくらいあるかを、DHSJRで確認する。②そのうえでこのような揺れが何故現れるのかを考察する。

2 DHSJRにおける低起上昇型間の揺れ例の抽出

Database of Historical Sino-Japanese Readings (DHSJR : ver.20240529)のうち、「漢語_見出し」欄が2字でかつ「声点型」が完全加点のもの、25545例を抽出する。次に「声点型」列をコピーし集計用の別欄を作成する。そこから「濁」を削除し「平軽」は「東」に変換し、「入」「入軽」を含むものを除外する。以上の正規化を施した上で、同じ「漢語」に異なる「声点型」が存在するものを抽出すると、7579例(データ不整備のために奇数となっている)となる。

以上の下準備を行った上で、正規化した「声点型」列から手作業で〈去去〉との間で揺れるもの、〈去上〉との間で揺れる漢語を抜き出す。低起上昇型間の揺れを考える上での条件を、「〈去去〉との間で揺れるもの」と「〈去上〉との間で揺れるもの」に限定したのは、観測の範囲を可能なかぎり「型そのものの揺れ」として把握するためである。したがって「〈平上〉との間で揺れるもの」などの条件は加えない。もしこの条件を加えた場合〈平去〉は低起上昇型間の揺れとは無関係に後項の上昇を保つかどうかの問題となる可能性があるからである。こうした理由で手続き上の設定としては、前項から始まる低起上昇性が後項も含んだ全体として実現されるかどうかを観測範囲としたい。

従って、「低起上昇型の揺れ」という問題設定が有効な場合、想定しうる揺れは次の2つの枠組みで捉えられることとなる。

- 〈去去〉との揺れ：典型的な中低形回避の形である 〈去上〉 から変化した 〈平上〉 〈平去〉
- 〈去上〉との揺れ：〈去上〉 変化した 〈平上〉 〈平去〉

それならば2つを区別せず、〈去上〉との間でだけ揺れを観測すれば良いとも思われるが、① 〈去上〉の多くは呉音語であり漢音語の観察が手薄になる、② 〈去去〉の中低回避形 〈去上〉との間に 〈平上〉 〈平去〉と揺れが現れると想定したところで、文献資料に偶然 〈去上〉が現れないことがあり得る、の2点から「〈去去〉との間で揺れるもの」を別立てとした。

3 〈去去〉との間で揺れる例

3.1 概要

本節では分析の手順上、〈去去〉から中低形を回避した 〈去上〉、さらには低起上昇型間としての揺れである 〈平去〉まで変化したと想定する。このため、韻書や呉音資料などで 〈去上〉 や 〈平去〉のほうが元の形と判断される場合は、扱わない*2。また声点型間の揺れが、字音系統が異なることに由来する場合や、韻書等に複数音が存在することに由来する場合*3も、取り扱わない。

表1が集計した表となる。表内には異なり語数、()内には延べ語数を示した。網掛けをしたセルは、全体として数は少ないながらも各声点型のうち比較的目的で現れている部分である。構造と声点型の関係を見ると、二字漢語の前項が1拍の場合は上声、2拍の場合は去声がそれぞれ多く、先行研究での指摘が確認される。以下では、各声点型の具体例に触れながら、その位置づけと解釈について分析を行う。

構造	去去	去上	上去	上上	去平	上平	平上	平去	平平
1+1	6(7)	2(2)	3(3)	1(3)	1(1)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)
1+2	6(7)	0(0)	3(3)	1(1)	0(0)	1(1)	0(0)	3(4)	0(0)
2+1	8(9)	5(5)	0(0)	0(0)	1(1)	0(0)	1(1)	1(2)	1(1)
2+2	11(18)	2(8)	1(1)	0(0)	6(9)	0(0)	0(0)	2(2)	0(0)
合計	31(41)	9(15)	7(7)	2(4)	8(11)	2(2)	1(1)	6(8)	1(1)

表1 〈去去〉との間で揺れを伴う二字漢語声点型の一覧

3.2 〈去去〉の位置づけ

一般的に中低形となる 〈去去〉は字音学習を背後に持つ漢音資料に多く見られるが、延べ41例のうち韻書と整合的に説明されるものは22例（「氣味」〈去去濁〉キヒ [専修大学図書館本和漢朗詠集 2-28a3] 他、以下「韻」と記す）、漢音資料にも基づけばさらに3例（「紫麝」〈去去〉*シヤ [専修大学図書館本和漢朗詠集 1-19b4] 他「漢」と記す）、合計25例が漢音であると推定され*4、その見込みは概ね首肯される。なかには仮名音注によってさらに裏づけられる例（「世事」〈去去〉セイシ [専修大学図書館本和漢朗詠集 2-28a4] 等）もあるが部分に留まる。この他、わずかながら呉音と思しき2例（「梅檀」〈去上濁/去去濁〉センタン [東洋文庫本法華経音訓 09b1_2] 「呉」と記す）もある。

*2 例えば「嘉瑞」には 〈去去〉 [世俗諺文_天理大学図書館 12504] と 〈平去〉 [世俗諺文_天理大学図書館 12503] とがあるが、韻書で《陰平+去》であるから 〈去去〉のほうが誤れる回帰ということになる。

*3 例えば「異類」は 〈去去〉 と 〈平平〉 の両様で現れるが、韻書で《去去》だが呉音資料では《平平》となるので、字音系統が異なると判断した。また、「鑒誠」は 〈去去〉 と 〈平去〉 の両様で現れるが、韻書に《去去》と《平去》とあるので、次の例は韻書等で複数音を有することによると判断した。

*4 漢音であるかの認定に際しては、佐々木勇 2009 が掲げる漢音資料を参照した。呉音の認定については、観智院本『類聚名義抄』和音、保延本『法華経单字』、九条家本『法華経音訓』、承暦古抄『金光明最勝王経音義』を参照した。

残りの3例（「勝母」〈去去濁〉〔世俗諺文_天理大学図書館 1206〕、「報恩」〈去去〉〔三帖和讃_専修寺 140〕、「數多」〈去去新濁〉シユタ（ナリト）〔元禄版四座講式遺 15-08〕）は字音系統を他資料から推定できなかった。これらは「加点の誤り」「一定の方向性を持たない散発的な学習の弛緩」であるとも考えられる。しかしながら字音系統とは切り離され、日本語として流通していたアクセント型を反映しているという可能性もある。あるいは〈去去〉のほうが「変化形」とみなしたもののからの「誤れる回帰」によって生み出されたという可能性もあるが、ここでは分析の手続き上、〈去去〉から「変化形」が生じたと仮定して扱っておく。

3.3 〈去上〉・〈上去〉・〈上上〉の用例

次の例は〈去去〉の後項が中低形回避のために〈去上〉となったと解釈されるものである。この方式の中低形回避は異音に典型的だが漢音にも見られることが知られる。用例の一部を示す。

語	〈去去〉	〈去上〉
楚思	韻 〈去上／去去〉 ソシ [専修大学図書館本和漢朗詠集 1-25a1]	〈去上／去去〉 ソシ [専修大学図書館本和漢朗詠集 1-25a1]
造次	韻 〈去去〉 [群書治要_金沢文庫_経部 9.228]	〈去上〉 [遊仙窟_醍醐寺 35]
旦暮	韻 〈去去濁〉 [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 2-19a5]	〈去上濁〉 ＊ホ [専修大学図書館本和漢朗詠集 2-19a6]
衆醜	漢 〈去去〉 シウシウ [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 2-39b3]	〈去上〉 ＊シユ [専修大学図書館本和漢朗詠集 2-40a6]
報恩	〈去去〉 [三帖和讃_専修寺 140]	〈去上〉 ホウオン [三帖和讃_専修寺 237]

前項が1拍字の場合、基本的には〈上〉となることもまた、先行研究を通じてよく知られた現象である。次のうち、前項2拍字となる「邂逅」「獸炭」には例外も含まれる。用例の一部を示す。

語	〈去去〉	〈上上〉・〈上去〉
氣味	韻 〈去去濁〉 キヒ [専修大学図書館本和漢朗詠集 2-28a3]、〈去去濁〉 ＊ヒ [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 2-28a4]	〈上去〉 [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 1-06a1]
數多	〈去去新濁〉 シユタ（ナリト）〔元禄版四座講式遺 15-08〕	〈上上〉 [尾張国郡司百姓等解文_早稲田大学図書館早 110]、〈上上新濁〉 [宝暦版四座講式]、〈上上新濁〉 [正徳版四座講式 002_015_b_03]
吏部	韻 〈去去〉 リホウ [専修大学図書館本和漢朗詠集 2-48b1]	〈上去〉 リホウ [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 2-46b3]
邂逅	韻 〈去去〉 [遊仙窟_醍醐寺 516]	〈上去〉 カイコウ [色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本 1/109a/3]
獸炭	韻 〈去去〉 シウタム／ームタム [専修大学図書館本和漢朗詠集 1-41b2]	〈上上／（去去）〉 シユタム [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 1-43a1]

3.4 〈去平〉〈上平〉の用例

次の例は〈去去〉の後項が中低形回避のために〈去平〉となったと解釈されるものである。中低形回避の方法としては〈去上〉と異なり、漢音に特徴的で、後項の低く始まる特徴を残した接合アクセントの反映と見られる。この項目は低起上昇型間の揺れには関与しないが、参考までに用例

の一部を示す。

語	〈去去〉	〈去平〉
氣味	韻 〈去去濁〉キヒ [専修大学図書館本和漢朗詠集 2-28a3]、〈去去濁〉*ヒ [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 2-28a4]	〈去平濁〉キヒ [色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本 3/063a/5]
艱難	呉 〈去去〉カン* [国会図書館本本朝文粹卷六 001_006_b_06]	〈去平〉カンナン [色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本 1/109b/2]
向背	韻 〈去去濁〉*ハイ [専修大学図書館本和漢朗詠集 2-15b5]、〈去去濁〉キヤウハイ [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 2-15b4]	〈去平濁〉キヤウハイ [色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本 3/062a/3]
梅檀	呉 〈去上濁/去去濁〉センタン [東洋文庫本法華経音訓 09b1_2]	〈去平〉センタン [色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本 3/107a/2]
遁世	韻 〈去去〉トンセイ [色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本 1/063b/2]	〈去平〉トンセイ [西方指南抄_専修寺 411.6]

〈上平〉との間で揺れるものは次の2例である。いずれも前項が1拍字であるために、〈去平〉から変化したものと考えられる。

語	〈去去〉	〈上平〉
故事	韻 〈去?去〉コ* [専修大学図書館本和漢朗詠集 1-29a2]	〈上平濁〉 [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 1-31b1]
畫匠	韻 〈去濁去〉クワ* [遊仙窟_醍醐寺 102]	〈上平〉 [遊仙窟_金剛寺 1.20972222222222]

3.5 〈平去〉の用例

従来声調・アクセント変化の枠組みでは扱われてこなかった〈去去〉と〈平去〉とで揺れる全例を示す。「貴賤」「四皓」「聚散」は〈去去〉が韻書と整合的であり、「勝母」も含めて漢音が多いと言えようか。「四皓」の〈平去〉例では前項に去声点を抹消した痕跡があり、両者の間に何らかの意識が働いた可能性を残す。また「勝母」では同じ文献のなかで〈去去〉と〈平去〉で揺れる。

以下に全ての例を示す。

語	〈去去〉	〈平去〉
貴賤	韻 〈去去〉 [世俗諺文_天理大学図書館 10305]	〈平去〉 [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 1-15b3]、〈平平/平去〉キセム [専修大学図書館本和漢朗詠集 1-13b2]
四皓	韻 〈去去〉*カウ [世俗諺文_天理大学図書館 1609]、〈去去〉*カウ [専修大学図書館本和漢朗詠集 1-42a2]	〈平去/ (去) 去〉*カウ [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 1-43b1]
聚散	韻 〈去去〉ソウサン [遊仙窟_醍醐寺 516]	〈平去〉シユサン [色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本 3/085b/1]
勝母	〈去去濁〉 [世俗諺文_天理大学図書館 1206]	〈平去濁〉 [世俗諺文_天理大学図書館 6408]、〈平去濁〉 [世俗諺文_天理大学図書館 11407]
報恩	〈去去〉 [三帖和讃_専修寺 140]	〈平去〉ホウナム [色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本 1/047b/6]

容貌	<去去> ヨウメウ [新猿楽記_尊経閣文庫_弘安本 022-06]	<平去> ヨウメウ [色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本 1/117b/2]
----	-----------------------------------	--------------------------------------

4 <去上> との間で揺れる例

4.1 概要

表1と同様に、<去上> との間で揺れる声点型の一覧を表2に示した。これらには表1の作成手順と同様に、その揺れが字音系統が異なることに由来する場合や、韻書等に複数音が存在することに由来する場合はあらかじめ除外してある。

構造と声点型の関係は、全体として前項が1拍の場合に<上>で始まり、2拍の場合に<去>で始まる傾向が見て取れる。後項の拍数は<平上>と<平去>の分布にやや関与しているかと思われるが、はっきりとした傾向としては読み取れない。

表下段の合計欄では、<上上>が多数見られるのは当然として、去声+去声から異なる結合の仕方を経た<去平><上平>もそれなりのボリュームで現れる。また低起上昇型の揺れと仮定した<平上><平去>も無視できない分量で現れる。<平平>については後述する。

構造	去上	上上	去平	上平	上去	平上	平去	平平
1+1	14(24)	10(38)	1(1)	0(0)	1(1)	2(3)	0(0)	0(0)
1+2	22(28)	18(72)	0(0)	0(0)	0(0)	5(10)	1(1)	0(0)
2+1	23(51)	1(1)	12(91)	1(3)	0(0)	4(5)	2(3)	4(8)
2+2	37(118)	4(8)	18(35)	5(6)	0(0)	2(16)	1(1)	15(33)
合計	96(221)	33(119)	31(127)	6(9)	1(1)	13(34)	4(5)	19(41)

表2 <去上> との間で揺れを伴う二字漢語声点型の一覧

<去上>のうち韻書と整合的に説明されるものは異なりで19例、漢音資料も用いればさらに10例、合計29例が漢音と推定される。呉音と思しき例は異なりで44例であった。残りの23例は字音系統が不明である。

4.2 <上上> の用例

前項1拍字が上声化したものが多いが、「方除」「誘引」などのように前項2拍字でも上声化したものもわずかながら認められる。用例の一部を示す。

語	<去上>	<上上>
義理	韻 <去濁上> キリ [色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本 3/063b/6]	<上濁上> キリ [唯信抄_西本願寺 41.4]、<上濁上> キリ [唯信鈔_専修寺 40.1]
醫王	呉 <去上> イ* [新猿楽記_尊経閣文庫_古抄本 062-04]	<上上> [正徳版四座講式 001_035_a_04]、<上上> [宝暦版四座講式]、<上上> イワウ [元禄版四座講式舎 02-06]
方除	呉 <去上> 淡*チ [新猿楽記_尊経閣文庫_康永本 091-01]	<上上濁> [新猿楽記_尊経閣文庫_古抄本 059-07]
誘引	漢 <去上> イウイン [色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本 1/013b/3]	<上上> [専修大学図書館本和漢朗詠集 1-08b2]、<上上> [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 1-10b1]

4.3 〈去平〉〈上平〉の用例

去声+去声の組み合わせから中低形となることを回避する方法の一つとして、単字アクセントを接合させた場合に〈去平〉があり得ることは既に述べたとおりである。漢音にまま見られる方法であるが、呉音にもまったく見られないわけではないことは、「成就」の例からも分かる。用例の一部を示す。

語	〈去上〉	〈去平〉
瑠璃	呉 〔去上〕ルト [色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本 1/079b/3]	〔去上/去平〕ルリ/[左]リウリ [色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本 1/079a/6]
成就	〔去上〕シャウシュ (セン) [元禄版四座講式 涅 22-10]	呉 〔去濁平濁〕シャウシュ [三帖和讃_専修寺 108]、〔去濁平濁〕 [貞享版四座講式 涅 22ウ 05] … (下略)
睚眦	韻 〔去濁上〕カヒサイセルニ [新猿楽記_尊経閣文庫_古抄本 054-06]	〔去濁平〕 [色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本 1/040b/2]、〔去濁平〕カイサイ [色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本 1/107b/5]

〈上平〉についても用例の一部を示す。

語	〈去上〉	〈上平〉
傳記	漢 〔去濁上〕 [宝暦版四座講式]、〔去濁上〕 [正徳版四座講式 002_018_a_04]、〔去濁上〕 テンキ (ヲ) [元禄版四座講式 遺 18-04]	〔上濁平〕 [正徳版四座講式 001_032_a_05]、〔上濁平〕 [宝暦版四座講式]、「傳記」〔上濁平〕 テンキ (ニ) [元禄版四座講式 羅 07-05]
三水	呉 〔去上新濁〕 [貞享版四座講式 涅 21ウ 05]、〔去上新濁〕 [正徳版四座講式 001_021_b_05]、〔去上新濁〕 サンスイ (ハ) [元禄版四座講式 涅 21-10]	〔上平〕 サンスイ [元禄版四座講式 涅 21-08]
天台	呉 〔去上〕 [色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本 3/022a/2]	〔上平〕 [金沢文庫本天台大師畫讃 210U06 : a06]

4.4 〈平上〉〈平去〉の用例

次に〈去上〉〈平上〉で揺れる全例を掲げる。本稿では〈平上〉〈平去〉は〈去上〉との間で揺れて現れたと想定する。下記の例では〈去上〉のほうに字音系統が推定できたものが多いが、「西施」「眼蓮」のように〈平上〉のほうに字音系統が推定できたものもある。表2では拍構造との関連は見取れない。異なりで12例中、8例が呉音と推定される。

語	〈去上〉	〈平上〉
畫女	韻 〔去濁上濁〕クワ* [新猿楽記_尊経閣文庫_古抄本 063-10]	〔平濁上濁〕クワ* [新猿楽記_尊経閣文庫_弘安本 016-08]、〔平濁上濁〕 [新猿楽記_尊経閣文庫_康永本 096-02]
智者	韻 〔去上〕 [世俗諺文_天理大学図書館 10009]	〔平上〕 [金沢文庫本天台大師畫讃 210U03 : a03]

雌黄	[呉] <去上> シワウ [専修大学図書館本和漢朗詠集 1-15b6]	<平上> シワウ [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 1-18a1]、<平上> シワウ [専修大学図書館本和漢朗詠集 2-37b5]、<平上> シワウ [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 2-37a2]
雄黄	[呉] <去上> ヲワウ [新猿楽記_尊経閣文庫_康永本 106-05]	<平上> ヲワウ [新猿楽記_尊経閣文庫_弘安本 023-07]
處所	[韻] <去上> シヨソ [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 2-03b2]	<平上> [専修大学図書館本和漢朗詠集 2-03b2]
眞珠	[呉] <去上濁> [遊仙窟_醍醐寺 181]、<去上濁> [専修大学図書館本和漢朗詠集 1-37b5]、<去上濁> [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 1-40a3]、<去上濁> シンシユ [専修大学図書館本和漢朗詠集 2-18b1]	<平上濁> [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 2-18a6]
西施	<去上> [新猿楽記_尊経閣文庫_古抄本 054-11]	[韻] <平上> [新猿楽記_尊経閣文庫_康永本 085-08]
山河	[呉] <去上濁> [貞享版四座講式 10 オ 03]、<去上濁> [正徳版四座講式 001_010_a_03]、<去上濁> セムカ [大慈院本四座講式 425_2]	<平上濁> [宝暦版四座講式]、<平上濁> センカ [元禄版四座講式 10-03]
田夫	[呉] <平濁上濁> [新猿楽記_尊経閣文庫_古抄本 057-02]	<平上/去上> [色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本 3/022a/6]
蘭麝	[呉] <去上濁> [新猿楽記_尊経閣文庫_弘安本 017-05]	<平上濁> [新猿楽記_尊経閣文庫_康永本 097-06]、<平上> [新猿楽記_尊経閣文庫_古抄本 064-13]
第三	[呉] <去濁上> [専修大学図書館本和漢朗詠集 2-10a4]	<平濁上> [貞享版四座講式 15 ウ 02]、<平濁上> [正徳版四座講式 001_015_b_02]、<平濁上> [宝暦版四座講式]、<平濁上> [大慈院本四座講式 437_2] (下略)
放還	<去上> [色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本 1/032b/1]	[呉] <平上濁> [国会図書館本本朝文粹卷六 001_018_a_07]

次に <去上> <平去> で揺れる全例を掲げる。漢音と呉音は半数程度ずつである。

語	<去上>	<平去>
翡翠	[韻] or [呉] <去濁上> ヒ* [新猿楽記_尊経閣文庫_古抄本 064-08]	<平去> ヒスイ [新猿楽記_尊経閣文庫_康永本 097-01]
蘭麝	<去上濁> [新猿楽記_尊経閣文庫_弘安本 017-05]	[韻] <平去> *シヤ [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 2-47b2]、<平去> *シヤ [専修大学図書館本和漢朗詠集 2-49a6]
眼蓮	<去?上> ケムレム [専修大学図書館本和漢朗詠集 2-26a2]	[呉] <平去> ケムレム [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 2-25b6]
悵望	[韻] <去上濁> [岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集 2-34b3]	<平去濁> [専修大学図書館本和漢朗詠集 2-34a6]

4.5 〈平平〉の用例

〈去上〉と〈平平〉とで揺れる例の一部を掲げる。これらについては今のところ解釈できる材料を持たないが、下記の例に見るようにいずれかが「加点の誤り」「一定の方向性を持たない散発的な学習の弛緩」と片付けられるものでもない。本稿で扱う低起上昇型の枠組みで扱うことも出来ないのでは、稿を改めて考えたい。

語	〈去上〉	〈平平〉
光明	呉 〔去上〕〔唯信抄_西本願寺 14.3〕、〔去上〕クワウミヤウ〔唯信抄_専修寺 14.2〕、〔去上〕クワウミヤウ〔三帖和讃_専修寺 20〕(下略)	〈平平〉クワウミヤウ〔元禄版四座講式舎 08-07〕、〈平平〉〔宝暦版四座講式〕、〈平平〉〔正徳版四座講式 002_028_b_02〕
焚焼	呉 〔去濁上濁〕ホムセウ〔大慈院本四座講式 409_3〕、〔去濁上新濁〕〔貞享版四座講式 04オ 03〕、〔去濁上新濁〕〔宝暦版四座講式〕	〈平濁平濁〉〔貞享版四座講式 14ウ 01〕、〈平濁平濁〉〔正徳版四座講式 001_014_b_001〕、〈平濁平新濁〉〔宝暦版四座講式〕、〈平濁平新濁〉ホンセウ(ス)〔元禄版四座講式 14-06〕

5 揺れて現れる声点型の近しさ

以上、漢語の声点型の揺れに何らかの条件があるのではないかという推測に立ち、「低起上昇型間の揺れ」を想定し、DHSJRに見られる揺れの実態を分析した。ここまでを振り返り、揺れとして現れる各声点型の近しさ(距離)を確認しておきたい。

表1に示した〈去去〉と揺れて現れる各声点型が、〈去去〉とどれくらい近い関係にあるかを示したものが表3である。具体的には〈去去〉の31(41)例を分母、各声点型を分子としてポイントを算出した。例えば〈去上〉は〈去去〉と最も近く、0.25(0.37)ポイントであるが、〈平上〉や〈平平〉は最も遠く、0.03(0.02)ポイントである。そのようにしてみると、「低起上昇型間の揺れ」で捉えられる〈平去〉は0.17(0.20)ポイントであるから、やはり無視できない関係にあると言えるであろう。このタイプは漢音が多かった。

	去去	去上	上去	上上	去平	上平	平上	平去	平平
例数	31(41)	9(15)	7(7)	2(4)	8(11)	2(2)	1(1)	6(8)	1(1)
距離	1.00(1.00)	.25(.37)	.22(.17)	.06(.09)	.25(.26)	.06(.04)	.03(.02)	.17(.20)	.03(.02)

表3 各声点型と〈去去〉の距離

表4では、表2に示した〈去上〉と揺れて現れる各声点型が、〈去上〉とどれくらい近い関係にあるかを示した。表からは〈上上〉が0.34(0.54)、〈去平〉が0.32(0.57)ポイントと最も近い関係にあり、後項が〈去〉となる〈上去〉・〈平去〉は遠い関係にある。「低起上昇型間の揺れ」で捉えられるうち、〈平上〉は0.13(0.15)ポイントであり、これも例外として等閑視できない関係にあると言えるか。このタイプには呉音が漢音の2倍程度含まれており、全体として呉音が多い。

	去上	上上	去平	上平	上去	平上	平去	平平
例数	96(221)	33(119)	31(127)	6(9)	1(1)	13(34)	4(5)	19(41)
距離	1.00(1.00)	.34(.54)	.32(.57)	.06(.04)	.01(.00)	.13(.15)	.04(.02)	.19(.18)

表4 各声点型と〈去上〉の距離

表3では起点を去声+去声に置くものの、「低起上昇型間」で揺れたと考えるのであれば〈去上〉

を起点に置くことと実質的に同じであり、表 4 と条件は同じであると言える。しかしながら表 3 では〈平去〉が目立ち、表 4 では〈平上〉が目立つ結果となっている。このことは二つのケースにおいて異なる経緯が関与していることを想像させる。

表 3 のように去声+去声を起点に置くものは、想定には反して、〈去上〉を介してではなく中低形を回避する目的で前項を直接に低平化させたのではないか。ならば後項は去声字をわざわざ別に変える必要はない。すなわち表 3 は中低形回避を目的とした異なる 2 つの声点型〈去上〉〈平去〉が、低起上昇型間で揺れているかのように見えているだけということになる。あるいはこのなかに〈去上〉を経たものもあるかもしれないが、それが大勢を占めるわけではないと考えられる。

一方、表 4 のように〈去上〉を起点に置くものは、低起上昇型間の揺れとして〈平上〉(〈平去〉) となったと考えるのが自然と言えるのではなからうか。なお、〈平上〉がどのような資料的位相に現れるかということにも注意が必要に思われる。目立つのは『和漢朗詠集』『本朝文粹』『新猿楽記』のような和化漢文であり、字音の規範性からは相対的に遠い文献であることが、この揺れを許容しているのではないかと考えられるのである。

6 低起上昇型間の揺れはなぜ生ずるか

6.1 〈去上〉型の不安定さ

前節の検討から、想定される「低起上昇型間の揺れ」という現象は、〈去上〉と〈平上〉の間に見られ、和化漢文などの位相に現れる呉音語に多く観察されると考えてよいと思われる。

では、なぜこのような揺れが生ずるのだろうか。ここでは〈去上〉型が不安定であったという次の 2 つの側面から考えたい。

1. 日本語アクセント体系における〈去上〉型の不安定さ
2. 去声拍衰退による不安定さ

院政期の日本語アクセント体系を考えたときに、去声拍で始まる語群は所属させられる語彙の少なさと所属語彙の特異さが相俟って扱いが容易ではないことが知られるが、例えば RH 型では「胡麻」、RHH 型では「翡翠」「紫苑」など漢語を多く含む(上野善道 2006)。文献資料を重視した早稲田語類でも、2 拍名詞第 9 類 RH 型(「椅子」「胡麻」「棕櫚」「枇杷」)、3 拍名詞第 11 類 RHH 型(「紫苑」)を分類上設定するが、所属語彙は主として漢語である。平安時代の日常漢語を取り上げた沼本克明 1979 でも去上…型(前項 1 拍と 2 拍を含む)は多く散見される。早田輝洋 1977 は、「去上」で始まる 3 拍以上の語はまず漢語であることなどを踏まえて、「去上上…」が和語にはないにもかかわらず漢語にこのように多いということを考えれば、種々の程度に日本語化して定着しているにせよ、やはりこれら漢語の音形を外来的だとみる意識は濃厚であったに違いない」と指摘しており、所属語彙が和語に支えられていないという点で、日本語アクセント体系という観点からすると不安定な型であったと想像される。

鎌倉期には生じていた去声拍の衰退によって、RH 型や RHH 型に所属していた和語の語彙はそれぞれ HH 型や HHH 型に合流することで安定化したであろう。漢語は、その規範性のために、和語ほどではないにしても、基本的には同様の変化を遂げたことを本稿でも確認した。

そのような中で LH で実現する去声 2 拍字の場合は、去声拍の衰退と直接的には無関係であるために LH の形で安定しており、字音としての去声(低く始まり上昇する音調)は強固に残り続

けたと考えられる。その結果、去声 1 拍字を前項に持つ語は高く始まるのに対して、去声 2 拍字を前項に持つ語は低く始まる性質を保つ、という相異なる対応が生ずることとなり、去声字を語頭に持つ語そのものの位置づけを不安定にさせたのではないか。確かに前項 2 拍字の場合はその低起性を、「運命」〈去平〉[新猿樂記_尊経閣文庫_弘安本 023-15] が体系変化後で LHLL (平家正節、上野和昭 2011) となるように、アクセント史のうえに安定的に保っている。ただ、表 2 に示すように語頭 2 拍環境であってさえ〈去上〉と〈上上〉で揺れる事例も存在するのである。

6.2 臨時的な〈平上〉

複合語と複合語の前部要素の音調的特徴の一致、すなわち金田一春彦 1944 が述べる「式一致の法則」は、古代の日本語アクセントにも高起式と低起式の別が存在していたことを示すが、冒頭に掲げた「紫苑」シヲニ〈去上上〉[観智院・名義抄僧上 43 - 6] が、「シヲニ(しをに)〈平上上〉[伏見宮家本・古今集 441] にもなり得るのは、低く始まる特徴を語全体で安定して実現させたものと思われる。

ところで中世の論義書に「出合」として漢語の声調変化を法則でまとめたもののうち、〈去上〉が〈平上〉との間で揺れることに言及したと解釈される一節がある(文献の詳細は加藤大鶴 2021)。

- (a) 去ヨリ上(ニ)移ニハ下ヲ張ル様ニ曰フ可シ。 経文〈去上・角徴〉 三身〈去上新濁・角徴〉 観音〈去上・角徴〉(『開合名目抄』金田一春彦氏旧蔵)
- (b) 長ノ去聲ヨリ上聲へ移ルハ上ヲ強ク廻サズシテ下ノ字ヲ張テ云ナリ。例セバ 金剛〈去上濁・角徴〉 三身〈去上濁・角徴徴〉 三賢〈去上濁・角徴徴〉 聲聞〈去上・角徴徴〉(『相承假名聲雜集名目』文化十三年(1816)写、金田一春彦氏旧蔵)

「張ル」とは高く発音することで「廻ス」とは上昇調に発音することである。a. では〈去上〉について後項を高く発音せよとして語例を挙げるが、語例の声点は〈去上〉であるものの節博士は「角徴」であり前項低平調+後項高平調、すなわち LLHH 型であることが示される。b. では前項の上昇調は強調せず後項を高く発音せよとし、語例はいずれも節博士によって LLHH 型であることが示される。ここでは低く始まり上昇するという特徴の元で、〈去上〉が〈平上〉に捉え直されているのである。ここに示されるアクセント型の実現は漢字と漢字の共時的な複合という形で、低く始まる特徴と上昇する特徴が語全体の中で「デフォルメ」されているとも考えられよう。

この把握の仕方は、『補忘記』や『四聲并出合讀誦私記』が三身〈去上新濁・[角徴]徴〉などと捉えることは異なるもので、普遍性を持つ説明にはなり得なかったものと思われる。その意味では低起上昇型の捉え方のひとつに過ぎないものであり、仮に「デフォルメ」されたアクセント型が実現したとしても、それは臨時的だったと考えるべきかもしれない。

「出合」に関わるこの言説は、本稿で確認してきた〈去上〉と〈平上〉の揺れをよく説明するのではないか。不安定な〈去上〉の、その音調上の特徴を外れない範囲で、臨時的に別の形で表した形が〈平上〉または〈平去〉であったと考えるのである。

7 結論

本稿で延べ来たったことを下記にまとめる。

1. 「低起上昇型間の揺れ」という現象は、〈去上〉と〈平上〉の間に見られ、和化漢文などの位

相に現れる呉音語に多く観察される。

2. 〈去去〉との間に見られる〈平去〉は中低形回避のために前項を低くしたものと考え、「低起上昇型間の揺れ」からは外す。
3. 院政期の〈去上〉型のうち RH…となるものは、漢語に特徴的なアクセント型であり、日本語アクセント体系のなかで不安定であったと考えられる。
4. 鎌倉時代に去声拍の衰退が生じると、語頭 1 拍字は高起式、語頭 2 拍字は低起式となって去声の認識に混乱を生じ、〈去上〉型自体（の認識？）が不安定になったと考えられる。
5. 語全体としての低起上昇を漢字の組み合わせにおいて実現したときに、〈平上〉が臨時的に誕生したと考えられる。

本稿では冒頭で述べた処理に困る揺れのうち、説明可能なものとして「低起上昇型間の揺れ」について考察を行った。「低起上昇型」は、字音単体ではなくそれらが結びついた語単位に対する音調の捉え方である。低起上昇型間の揺れが、〈去上〉型の前項が 1 拍と 2 拍で異なる振る舞いをしたことに端を発する不安定さによる、という想定が正しいとすれば、拍に分解されて日本語アクセント体系に融和される動きの中に揺れのきっかけがあったということになる。しかし論義書の記述を見る限り、いったん〈去上〉となったものを〈平上〉で捉えるにあたっては、漢語アクセントが漢字単位に分解して再構成されることも想定された。

以上の見通しが有効であれば、漢語アクセントの歴史を考える上では、漢字同士が結びついてひとつの単位になったものが担う歴史と、複合語規則のように漢字同士がその都度結びついてアクセント型を構成する共時的な観点との両方が必要、ということになる。

参考文献

- 石山裕慈 2011 『『本朝文粹』における漢語声調について』 訓点語と訓点資料 126
上野和昭 2011 『平曲譜本による近世京都アクセントの史的研究』 早稲田大学出版部
上野善道 2006 「日本語アクセントの再建」 言語研究 130
加藤大鶴 2015 「音韻史を担う漢語アクセント -中低形回避・低起上昇型間の揺れ・原音声調との非対応例を中心に-」 論集 10-, 31-64 頁
——— 2020 「同床異夢の去声—上昇調と上昇拍の低起性を中心に—」 国文学研究 191
——— 2021 「「出合」における「去声字に後接する去声字」再考—漢語アクセントの形成という観点から—」 アクセント史資料研究会『論集』16
——— 2024 「漢語のアクセント史研究をめぐる諸問題」 歴史言語学 13 近刊予定
——— 2025 『『和漢朗詠集』鎌倉期加本本の漢語声点』 国語と国文学 102-x 近刊予定
金田一春彦 1944 「類聚名義抄和訓に施されたる声符に就いて」『国語学論集』 橋本博士還暦記念会
佐々木勇 2009 『平安鎌倉時代における日本漢音の研究 研究篇』 汲古書院
沼本克明 1979 「平安時代に於ける日常漢語のアクセント」 国語国文 48-6
早田輝洋 1977 「生成アクセント論」 大野晋・柴田武（編）『岩波講座日本語 5 音韻』 岩波書店